

Title	コリンウッドの『ブリタニヤとローマ帝國』
Sub Title	
Author	間崎, 万里(Masaki, Masato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1929
Jtitle	史学 Vol.8, No.3 (1929. 11) ,p.109(431)- 136(458)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19291100-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

コリントウッドの『ブリタニヤ とローマ帝國』

はしがき

本誌第八卷第一號に紹介して置いた、W・J・ペリー氏の『イギリス最古の文明』につづく、R・G・コリンウッド氏の講演は、前者と等しく、世界の平和思想に貢献すべく、歴史的統一を説くのであるが、ローマ帝國時代に於ける英佛海峽の文化的無價値を力説してゐる點が面白いので、再び本誌の餘白を借りることとした。因に Briton をブリテン、その住民なる Britons をブリトン人と譯するのが、通例であり又それでよいのであるが、こゝでは、ローマ時代といふことを特に聯想せしめるために、わざと、前者をブリタニヤ、後者をブリタニヤ人と譯して置いた。

ブリタニヤがローマの一屬州となつたのは、英

佛海峂を、ローマ帝國の國境として取扱ふことが不可能だつたからである。ユリウス・ケータルがガリヤ征服の時、その東北地域の部族は、既にその頃、東南部イギリスへの侵入に成功してゐた。こゝに是等部族の分派は英佛海峂の兩側に住み、彼等の間には相互の交通が頻繁に行はれた様である。ローマのガリヤ征服に先立つ直前なる時期の文化地圖は、英佛海峂を國境とせずして、ブリタニヤ東南部とガリヤ東北部とをたゞ一と色に塗つてゐたはずである。

アウグスツス皇帝の政策は、ローマ帝國の諸國

境を、及ぶ限り安定ならしむにあつた。このために、帝はその諸國境を河川の如き自然の分界線に沿ふて設けたのである。河川は大量輸送と巨砲を有する軍隊に對するの外、極めて貧弱な障礙物ではあるが、しかし卓越した分界線である。英佛海峽についても、同じことが言はれる。良風を得て船舶を航走せしめるることは、航海術中の最も平易なる仕事である。港から港へと沿岸傳ひに渡海し得るものは誰でも、常軌を踰へての冒險を感じることなしに、英佛海峽を横斷し得る。この海峽の横斷を我等にとつて一つの冒險たらしめる状態は純然たる政治的のものである、外國語と、それから見慣れぬ建築と服装とが我等に安易を感じしめず、また旅券と稅關の手續が大なる自然的障碍なき旅行に人爲的障碍を作つてゐる。それ故に、英佛海峽はその兩海岸に住する部族の共同感を打ち破り得るほどの要塞を築造したときのみ、國境としての用をなすけれども、ローマ人は之を企てたやうに思はない。ローマ人は彼等がライン河やドナウ河を取扱つたと略同じ様に、この海峽を

取扱へたかも知れけれども、彼等は當初その障礙としての效果を餘りに大きく見積り過ぎて之を放任したのであつたが、後ち、漸くにしてこの海峡に要塞を築くか、さもなければ、ブリタニヤを併合しなければならぬといふ破目に立至つたのである。

屢々口にせられる征服の物語をこゝに反覆するの必要はない、けれどもその動機を考察することに我等は、恐らく無關心ではあるまい。ローマ人はブリタニヤの征服をその實際よりも平易な仕事であると思つたらう、また彼等はこの島々の如何に大なる部分が、海江や海峡によつて切斷せられた山國からなり、征服に難く、殆んど征服に價しないことを理解することが出來なかつたらう。彼等は確かにブリタニヤの島々全體を併呑する所存ではなかつた、ドミチヤヌス帝がアグリコラを召喚したのは明確に最終的にこの政策を放棄せることを示す様に見える。がしかし大體に於て彼等は明かにブリタニヤその者を併合に價する國と認め且つガリヤを適當に統治するには併合しなくては

ならぬ國であると、認識したのであつた。東南部イギリスの肥沃なる良地と稍高度の文化を有する住民とはローマ帝國にとり價値ある増加であつた。それから、この地域の外にすらも鑛物⁽¹⁾が見出されることが知られてゐた、要するに、イギリスは、ローマ人の知れる限り、ガリヤの北部として少なくとも併合するに適當なる國であり、且つその鑛富の點から見れば、恐らく適當以上の國でもあつた。ローマ人が英佛海峽に築城するよりもブリタニヤを征服した方が利益であると考へたのは、恐らく正しいのであつた。

クラウディウス帝の時代のブリタニヤは、百年前にケーナルが侵入したる頃に見たるほどの粗野なる國ではなかつた。この一世紀間に文明の大なる進歩⁽²⁾が見られ、この進歩は既にローマ化の行程に踏込んでゐた。ローマの流行、ローマの製品、ラテン語の使用すらもが、既に征服開始前に、東南部ブリタニヤに多大の進出を遂げてゐた。この故に征服の開始せられたときには、征服者はその風習と言語に於て彼等と全くの他人ならざる國に

這入つて來たのである。この國の貴族社會は、兎に角、ローマの風習について多くのことを知つて居り、新來者に對して少しも惡意を抱かぬのであつた。ローマの征服者を、アフリカのコンゴー流域或は黃金海岸の森林中に闖入せる三十餘年前のヨーロッパの軍勢、又はメキシコのモンテズーマの如きの領域に侵入せるコルテスなどに比すること位甚しい誤りはない。ブリタニヤの部族的諸王はメキシコやアフリカの酋長の如きものではなく、彼等は既に一部ローマ化せる統治者であつて、一層さらならんことを欲し、さうなることも出來、その後、クラウディウスの太守として統治することを望み得たのであつた。疑もなくこの様な状態は東南部に限られ、その地であつても、必ずしも一般的でなかつたが、しかし、チチエスターに於ける證據の確實なるコヂヅブヌスの例⁽³⁾に見られる事實は、ローマ征服前のブリタニヤに於ける文明の水準を示すものである。

故に大體に於て、東南部の部族は既にローマの文明と一層密接なる接觸をなすべく成熟して居た

ので、之を歓迎したのである。この事はボーデックカの反亂によつて非認せられない、その故如何となれば、第一に、その反亂は孤立的現象であつて嚴格に局地的性質のもので、他部に於ける何等『同情的』反亂の如きものに依つて全然應援されなかつたし、第二に、その原因はローマ政府その者の不人望ではなく、ローマの或る官吏達の横暴にして威壓的な政治があつたのである。征服後、若干ローマ人が個人的に無理ならぬ憎惡の對象となり、之がローマの帝國政府に對する反亂を導いた事實は、ローマの統治本來の制度が歓迎せられなかつたことを證據立つるものではない。

比較的容易に新制度を受容した範圍と大體見られるのは、ケントからドーセットとソマセットに至るテムズ河南のイギリス南部の全帶狀地、その北は中國地方、東アングリヤ地方、及び恐らくリンカーン州等東部縁邊地帶を含む一地域、西に於ては、コッウォルズ山脈よりなる他の遠隔なる地域である。この地域は、之を全體として見るとときは、少なくとも三世紀半の間、ブリタニヤの文化

地域をなしてゐた。北部のアルドボロー、中國地方の中心なるレススター、ウェールズ邊疆のカーウエント (Caerwent) とロクスター (Wroxeter)、西南部のエクスターは、文明の中心たるよりは寧ろ前哨地たるに止まり、この北と西の一切は塞外にあつて、軍事的生活に委ねられた單なる邊境地方であつて、文化生活の極めて稀薄なる徵候を示すのみであつた。故に、ローマ・ブリタニヤ文明といふときは、多くともイギリスの半分を蔽へる全く小なる地理的範圍に於ける何かについていふのである⁽⁴⁾。

この範圍内に於けるブリタニヤはローマ帝國の生活に十分に這入り込んだのである。これはそれ自からの文明が消滅して、純然たるローマの文化となつたことを意味するのではない。その様なことは少しも起らなかつたのである。ブリタニヤはローマの道路を以て接合せられ、ローマの都邑と別墅を點綴し、ローマの藝術品を以て裝飾せられ、ローマの方法によつて統治せられた。けれどもそれは半ば眞理たるに止まる。道路は、教育なき人

人の想像を馳するが如く、ローマの軍團のために維持せられたのではない。道路は、征服後、たゞ第四世紀の末葉に於けるピクト人との戦争の如き、極く少數の危機を除けば、毫もローマ軍團兵の釘靴を反響させたことはないのである。軍隊は望まれたる處に赴き、ハンバー河或はタイン河に直送せられ、南方の道路は平時の輸送に用ゐられた。又都邑はローマ的であつたけれども、そは又同時にブリタニヤ的でもあつた。強ひて差別を立つれば、ローマ的なるよりも殆んどすべてブリタニヤ的であつた。都邑はローマ帝國中に劃一に採用せられた雛型に従つて設計せられ建設せられたのではない。そこには斯様な雛型は存しなかつた。そはローマの思想にブリタニヤの習慣を配したる雛型に基いて設計せられ建設せられた。別墅もその様であつた。是等の別墅に住めるブリタニヤの豪族は、征服前ですら、既に英佛海峽の彼方から齎らされたローマの土器を使用し始めてゐた。ブリタニヤ豪族の血統を継承したものであつた。征服後も前と同じに、ブリタニヤのこの文化區域

の住民は地主たる豪族と農民とに分たれてゐた。ローマ人は、ブリタニヤの習慣が之にローマ法の原理を繼受して變化を來たした場合の外は、地主からその權利を奪ひ、或は主從間に干渉することはなかつた⁽⁵⁾。征服は財産の所有者に安全を増したが、その剝奪を生ぜしめるることはなかつた。

その藝術的方面に於ては⁽⁶⁾、ローマ・ブリタニヤ文明は、外國から益々大規模となれる物品の輸入により、又舊技術の衰亡を導ける新技術の輸入によつて影響せられた。ローマ征服前のブリタニヤの美麗なる金屬細工は、これが未開の北部に於てかすかに光輝を放つてゐる外は、全たく消滅してしまつたけれども、この古代ブリタニヤの技術に代はれる、石刻術は、これより前のブリタニヤ人の全く知らなかつた技術である。この新技術に連れて、新様式の生じたことも無理ならぬ次第である。ブリタニヤ人はシャンブル・エ・ナメルの喇叭模様や渦巻を石に刻して不朽に傳へることはしなかつたけれども古典式の寺院を建て、又古典式の墓石と古典式の立像を彫刻し始めた。皮相の觀

察をなすものにとつては、彼等はその顯著なる藝術的獨創を悉皆失なつて仕舞ひ、ローマ帝國の劃一的大文化の全く下積となり終つたかの如くに見えやうけれども、ローマ帝國の宇大的文化なるものは實は神話なのである。帝國は思想の廣汎なる交換所であつた。宗教的、藝術的、或はその他の運動であつて苟も生命あるのものは、何れの方に向へも、その領土内に於て、無限に之を傳播さすることが出來たが、しかし、そはその傳播に方り、必然に修正を受けたのである。北シリヤのオロンテス河は、ローマのチベル河に放水せるために、ユヴエナリスを不快ならしめたが、この様に汚されたるチベルの河水は、イギリスのテムズ河に流入することを得、また流入したのである。がしかし之から生ずる混合に常に第一位を占むるのはテムズ河の水であつて、チベル・オロンテスの流れと北阿のシニーブス河或はスペインのエブロ河との混合とは頗る異なる風味を示したのであつた。帝國內の諸地をその藝術的作品について比較を初らよつゞ、各自の固生ま祭立つて見える。この

標準から判すれば、ローマ領ブリタニヤの開化地方(上記の文化地域以外の作品を除く)は北ガリヤとゲルマニヤに極めてよく類似し、南ガリヤに餘り似ず、帝國の他の部分と著しく異つてゐる、また北ガリヤとの類似は全たく相違なきほどの完全さではない。ブリタニヤの文化地域は實に人種的にも文化的にもガリヤの遠隔なる屬州であつて、それ自身の稍蒙朧たる個性を有するものといふべきである。故に、ローマの占領前も占領中も共に、東北ガリヤと東南ブリタニヤを含む地域には、全ブリタニヤ或は全イギリスをすらも含んでその外に出でざる地域よりも一層同一性を有してゐると言ふのは正しい。例へば、ライン河流域なるトリエルとボンの如き博物館に蒐集せる彫刻を、ブリタニヤの文化地域に見出された同種の作品と比較するものは、何人も之を證明することが出来る。大體に於て、類似は著しい。けれどもなほブリタニヤに於ては大陸に見出される若干の性質が見られず、又さほどではなきも、大陸に於てはブリタニヤこ見出される皆干り生質が見らるゝなりでし

る。この點からして、イギリスのバスの有名なゴルゴンの像は大に論議せられたものであるが、これはローマ帝政時代の藝術に明白なブリタニヤ分子を存することの證據として全く單獨のものであることの暗示を傳ふる價値があると共に、十分之を傳ふるものである。これが單獨であると主張することは言ひ過ぎやうけれども、またその表示してゐる證據の量と個性の程度も誇張され易いのである。我等がブリタニヤに於て古代のギリシャ・ローマの傳統のそれとは極めて異つた藝術を取扱いつつあることは十分明白である。建築上の裝飾に於てすらもギリシャ・ローマの意匠のケルト化は見逃されない位明白過ぎるのである⁽⁷⁾。しかし我等がローマ時代のブリタニヤの藝術はローマ的ではなく、ケルト・ローマ的であると言へるときには、なほこの藝術に所屬する個性の正確なる程度は、英佛海峽彼岸の地方のそれと異なるものとして断定しなければならぬ。或る個性を確かにそれは持つてゐた。さもなければ、バスのゴルゴンの像はこれ以上、説明が附かぬのである。この困難は概

して證據の缺乏に基づく。ローマ時期の遺物はこの屬州の北部及び西部には豊富であるけれども、開化せる唯一の部分には不思議にも乏しいのである。その故は文化地域の都邑の大部分（ロンドン、カンタベリー、コルチエスター、ウインチエスター、チチエスター、シスター、バス等）が、初期からして極めて完全に建設せられてゐて、そのローマの遺物は閉塞せられ或は分散しかくして破壊せられたからである。是迄この地域に於ける都邑を發掘し得ることが見出されたシルチエスターの一例に於て、その地には彫刻の驚く斗りの缺乏と、それのみについて云へば、建築の斷片、碑銘、同種の遺物が乏しかつた。バス及びその他からの彫刻及び建築の立派な斷片はこの點に於てシルチエスターが典型でないことを示してゐる。

ローマ時代のブリタニヤの宗教生活も之を調査したならば同様なる結論に達する。こゝにもまたローマ的でなく、ケルト・ローマの宗教が見出される。この宗教に於ては土人の神々とローマの神々が一緒に混同されて複合名を以て禮拜せられた。

その證據はすべて金石文なので、軍事地域は取り分け澤山に存する、しかしバスの『スル・ミネルヴァ』のそれの如き例は、この屬州の文化地域に於てもこの原理の働くことを明かにする、それから、

この地域に於ける他の例も引くことが出来る。ケルトの宗教は地方的の神事であつた⁽⁸⁾。廣き地域に拜まれる一神を見出すのは例外である。その様な場合は、一般に旅行者がその出生地の神々を拜みたい慾念に基くのである。その様にして移置せられた禮拜は土着して繁榮することもあらう。その例證はローマ帝國のケルト諸州に舉示せられるけれども、そはケルトの神々が各自比較的小なる地域に拜されたことの通則を覆すものではない。

それ故ローマ・ブリタニヤ宗教内のケルト分子はガリヤの接壤部に拜されたものと大體異れる神々の集團を示すのであるが、しかしローマ・ブリタニヤの宗教はそれ故ローマ時代のガリヤのそれと全然或は原則的に異なる⁽⁹⁾と論ずるのは誤りであらう。ブリタニヤの地方的禮拜がガリヤのそれと異つてゐるのはたゞ彼等が相互間に相違せると同様

なのである。ブリタニヤの軍事地域は宗教的好奇心の完全な博物館であつた。が、しかしローマの軍隊の禮拜については、こゝでは問題としないのである。

ローマ的ケルト的分子の同様の混合は極めて著しく政治上の事項に於て示されてゐる。ローマ帝國の副將軍とその幕僚はローマの側を代表したるも、近代的帝國の見地からしてこの問題に近づく研究者は、そこには中央政府の任命を受けて、その『地區』の行政に對して責任を負ふ文官の痕跡がないのを見て驚かされる。その様な觀察は全帝國に多少とも適用せられる、或る場合には(ポンチウス・ピラッスの如く)『地區』を統治せる皇帝の財務官吏を別とすれば、文官はこの種の事務を有しなかつたのである。他面に於てブリタニヤは、イタリーの如き、自治的都市の國でもなかつた。地中海地域の文明は何時も概して都市文明であつた。その單位は都邑であり、その自然の發展は獨立の市邦から自治の市邑へと進んだ。しかしイギリスには決して都市文明を有したことがない。古代の

ブリタニヤ、アングロ・サクソン時代のイギリス、中世のイギリス及び今日のイギリスに於ての根本的事實は都市の住民でなく、地方の住民であつた。産業革命ですらもこれを假裝せるにのみで、根底に於ては、變化を見なかつたのである。さうして、産業革命前の何れの日附に於ても、イギリス生活の重心が地方にあることを一寸でも疑つたものはなかつた。今や地方的守護神 (*genius loci*) の頑固な禮拜者たるローマ人はこの様な事實に感受的であつた。彼等は自治の都市制を設けてブリタニヤの制度をイタリイ化せんと企つることはなかつた。彼等は都市を建設した、或はその到來前の進歩の時期に恐らく初まつたかも知れない都市建設運動を奨励し之を指導した。さうして是等の都市は實に政治の中心となつたのであるけれども、全ブリタニヤには一つの自治市⁽¹⁰⁾しか存しなかつたので、そは決して自治の市制とはならないで各自地方の地區の行政上社會上の中心をなす地方の首府となり、是等の地方地區は、ローマの知事により專斷なる計畫に従つて區劃せられたもの

でなく、たゞ古代部族の領域に過ぎなかつた。各部族はかくして自治の政治團體となり、その主要なる人々はその内政を行はんがために、その主要都邑に集會した。疑もなくこの部族的役人の任務の遂行を監督することが帝國副將軍の事務だつたのである。けれども彼等よりその任務を解除することは彼の任ではなかつた。

我等はローマの占有の初期に方り、コヂヅヌス王の例に於て、この政策の發端を見た。そはクラウデウスの治世からホノリウスの治世に至るまで、常住執り來つたところの政策であつた。第三世紀の初葉に、シルレスの部族 (*civitas*) の共和国により、その元老院令 (*ordo*) を以て⁽¹¹⁾ カトウエントなる州の首都に一つの立像が建立せられた。こは我等に部族政治の形體と用語とを洞察させるものがある。これよりも一世紀も前なるために、更に顯著であるのは、ロクスターに最近見出された板碑であつて、前一三〇年に、ハドリヤヌス皇帝のために、コルノヴァイイ (*cornovii*) の部族 (*civitas*) により或る大建築が建設せられたことの

次第を刻してある。これは第二世紀の初業に於て、高度の文化地域たる東南部のみならず、ウェールズ北部境域の比較的野蠻なる遠隔の地區にも、部族自治の制度が既に高潮に達してゐたことを示すもので、或る意味に於て、最も顯著なる證據は、ハドリヤヌスの城壁より得られる。その連續せる四個の碑銘⁽¹²⁾はこの邊彊の大工事の部分がジムノニイ、カツヴエラウニ、ブリカンテスの三部族それゝの團體行動によつて設けられたことを示してゐるのである。是等の碑銘は強制労働群の存在を記念するものと思はれてゐたけれど、強制労働群は軍團と全然同じ仕方でその事業に調印することとは決して許されなかつた筈である。それがよしや、許されたにしても、自からを部族(civitas)と稱しはしなかつたらう。要するに、この地に於てもロクスターに於けると同じく、夙にハドリヤヌス皇帝の治世に、部族的政治の明白なる證據がある。さうして、ローマ時代のブリタニヤについての最終の記事は、四一〇年ホノリウス帝が是等同一の部族に彼等自からの防衛のための

準備を命じたこと、別言すれば、最早や彼等をして單に地方政治に參與することを許したのみならず、今迄帝國知事及びその屬僚の特別任務であつた所のブリタニヤの武力組織を企てることを許したことである⁽³¹⁾。

こゝにも亦ブリタニヤと北部ガリヤとの統一が完全である。ハーヴィアファイルド⁽¹⁴⁾を引用すれば、『北部及び西部ガリヤに於ては、嚴格にいふ所のローマの市制(Municipalities)は缺けてゐた。それにも拘らず、この地には、或はローマ官廳の獎勵により或は自然の成長により、都邑が發生した。是等の都邑はローマとガリヤの混生兒であつた。是等は土着的なる郡の地區の『首都』であり、その地方政府は土着的のものであつた。しかしその長官の稱號は、ローマ市制の用語を借用し、その政府はローマの市制の手本に同化せられた。』ローマ時代のブリタニヤの地方政府の記述としては、以上には正確たり得ないのである。

以上を要約して言へば、ローマ帝國にとり英佛海峽は存しなかつたのである。西部地中海から北

進する人は南ガリヤガが終つて、北ガリヤの始まる一つの重要な境界を超える。その次ぎの重要な境界は、文化的ブリタニヤの終末であつて、軍事的境域地區の發端を示す所のものである。南ブリタニヤと北ブリタニヤとの間には、前述の如く、兩國のそれより地域間を分離してゐる相違と同じ細かい相違が存する。また廣き甚だ強からざる程度の相違が存する。兩國の中、ブリタニヤは、ローマの屬州の大組織に於て、より遠方にあつて、文化と富の劣れる、さうして、大なる軍隊に基因する優勢を論外とすれば、勢力の劣れるものであつた。その都邑は北ガリヤに比し、人口が少なかつた。その都邑は北ガリヤに比し、人口が少なかつた。その都邑は北ガリヤに比し、人口が少なかつた。

はゐるけれども、最高級の思辨的大天才であつたことが分る。要するに、北ガリヤと相違せる如何なる個性が、文化部ブリタニヤに所屬するやは、結局、最も緻密なる吟味によつてのみ發見されるのである。さうして、兩國間のこの結帶はローマ治下の彼等の政治史に反映してゐる。カラウシウスの治下にブリタニヤの孤立を生ぜしめた所の、英佛海峽に於けるサクソン海賊の勃發の如き偶發事件を除けば、ブリタニヤと北ガリヤの運命は決して異なるものではなかつた。篡奪の皇帝が一方を支配せるときには、彼はまた必然に他方をも支配しなければならなかつた。

しかも、特性及び運命のこの様なる本質的の合一是第五世紀の第一、四半世紀までしか續かなかつた。チューントン部族の北ガリヤに侵入せるものは、是迄ローマ・ガリヤ文明の結構中に併呑せらなかつたが、北ガリヤも亦その何れとも生じなかつた。而して、異教の首長ペラギウスのことを書かぬ譯には行くまい。このブリタニヤ人は、論争したものは、決してローマ・ブリタニヤ文明の後繼者と自認するには至らなかつた。その文化の遺

産は、その目に見える物質なる限り、その手に渡らずに亡びた。サクソンの大王、アテルスタンの如きが帝号を借用せるは、たゞ彼が彼自からの直接の種族でない臣民に對する關係を表明するための用語を見出さんとする企に過ぎなかつた⁽¹⁵⁾。アングロ・サクソン時代のイギリスは、ローマ時代のブリタニヤに、法律、制度、宗教或は藝術に於て感知し得る何物かを負つたのである即ち一方の田園的或は都市的生活が何等かの意味に於て、他方の田園的或は都市的生活の直續であつたことの證明は、幾度となく試みられたるも、決して十分には證據立てられなかつた。ローマ時代のブリタニヤの都邑は、既に第四世紀の終らぬ中に、ピクト及びスコット人の侵寇により衰亡しつゝあつたし、この田園貴族の生活は、これにも優る烈しい損害を受けた。それは、その別墅の多數がヴァレンチャヌス一世の治世に於けるピクト人の大侵入後殆んど復活し得なかつたやうに見えるからである。アングロ・サクソン初期に於けるローマ都址を占有せる痕跡は殆んど稀であつて看却してもよいほど

であり、ローマ別墅址を同様に占有せる痕跡は全く存しない。』ローマ時代のブリタニヤとサクソン時代のイギリスとの間には、動かし難い大なる深淵がある』と、ハーヴィアフィルドは記してゐる。この深淵を充たして、『ブリタニヤの失はれたる二世紀』に於ける國狀を記述すべく何事がなされ得やうか。こは我等の當面の目的に大に關係のある問題である。何となれば、ヨーロッパ史の統一を見るべく企つるに方り、ローマ・ブリタニヤ文明に降下せる運命に無關心なるを得ないからである。

古き文學的資料からして、サクソン征服の可なり信じ得べき説話を組立てるることは出来る。アングロ・サクソン年代記、ジルダス、ビード、ネニウスその他早き時期の著作は、細部に於ては、問題となる點もあるけれども、大綱に於ては、首尾一貫して居り、純然たる先驗的理由により、全く信ぜられなくはない物語を我等に與へてゐる。この物語によれば、ローマ時代のブリタニヤの滅亡は二部に分たれる。第一は、第四世紀の末に初まつて、ピクト人とスコット人が唯一の敵者であつた

時なる四四六年に至る時期であつて、この四四六年といふ年はアエチウスの第三次統領の日附であるので、ジルダスによると、こは確かに『三度び統領職を舉行したることを (Agitio ter consuli) ブリタニヤ人によつて傳へられたる年であるに相違ない。この物語はハドリヤヌスとピウスの城壁の建築とそれからブリタニヤ人を援助すべく渡来て來たローマの軍隊の築造であるとせられてゐるサクソン沿岸の要塞の築造とをこの時期の間のこととしてある。四四六年にローマ人はそれ以上の援助を拒んだので、そこでブリタニヤ人は團結を固めて、彼等自からの努力によつて、ピクト人とスコット人を破つたけれども、この禍患が除かれると奢侈と遊惰に耽つた。第二の時期は、四四九年のヘンギストとホーサの上陸を以て始まる。元來ピクト人に對抗するための同盟者としてやつて來た彼等は、鋒を轉じて彼等の主人に反向ひ、長期の激烈なる交戦が初まり、そはアングロ・サクソン年代記によると第六世紀の終りまで續いたのである。この時期の間にローマ・ブリタニヤの文明

はサクソンの劍によつて片つ端から破壊せられ、その終りには、ローマのブリタニヤは、西方の要塞を除いては、何物をも餘す所がなかつた。

この物語の大部分は寓話として久しく却けられてゐた。けれども、不幸にしてよく證明されない残りの部分がつい近頃まで、サクソン征服に關するすべての理論の中軸となしてゐた。しかるに、最近三十年ばかりの間に、遽に證據が集積せられこの様な物語を不信ならしめた。もしアングロ・サクソン年代記が近似的にも正確なものであつたとすれば、我等は東部と南部の海岸にサクソン初期の墓地を、又内地、特に大戰のあつた古戰場に、ずつと後代の墓地を見出すべき筈である。更に他の側から初めて我等は、この年代記に於て何れも五七七年にサクソン人によつて取られたと記述されてゐるグロスター、シレンスター、バスなどの地に、ローマ後期の長期占有の證據を見出すべき筈である。しかし事實は頗る相違してゐる⁽¹⁶⁾。サクソン移住者の初期の遺物は、沿岸地に限られないと、國中にバラ撒かれ、小地方に濃密なること

なく、特に航運を通ずる河川の岸邊に見る如く、比較的少量に存するのである。この證據は、リーヴ氏の『アングロ・サクソン居住地考古學』(E. Thurneysen Leeds: The Archaeology of the Anglo-Saxon Settlements) の中に、蒐集せられ論議せられてゐるが、そは、最初の移住者が比較的小なる部隊をなして、彼等を拒むこと能はざるか或はこれを欲しなかつた地方を経て、川を溯り或は陸路を旅行し來つて、居住に好適なる地點を選んだのであることの假定に於てのみ解せられるのである。分與し得る土地と戰ふべき敵を持つてゐる住民に、恐らく歓迎されぬことのなかるべき、斯様な平和的小居住地の典例を、ヘンギストとホーザの物語は記述してゐる。ブリタニヤ人とサクソン人とは、今日近東に於けるキリスト教徒と回教徒の如く、別個の村落をなして併住し、各自彼等自からの農耕形式を行なひ、各自彼等自からの法律と習慣に従つてその統治を行へる征服の一階段が存してゐたに相違ない。最初、ブリタニヤの部族的官憲は、理論上は少なくとも至上權を有し、新移住者は之に

對して或る種の臣從をなし、ヘンギストとホーザに記されてゐる如く、彼等の土地の報償として恐らく戰争を約したのであるかも知れぬ。がしかし、ブリタニヤ部族の實勢力は第四世紀末と第五世紀初の侵寇により打破せられてゐた。ローマの側からしては、第五世紀初期より以後たり得ない時日に於て、首要諸市が破壊せられ或は遺棄せられたことを、考ふべき至當な理由がある。蓋し是等諸市に見出された日附の最も新しい遺物は、一般に四〇〇年頃のものであつて、その日附以後に於ての苟も實際上の長期占有は、ローマ後期の發展として承認せられ得る新型の家具類を產出したに相違ないからである。考古學の暗示する所によればローマ・ブリタニヤの文明は、三六〇—一八〇年の頃その大打撃を蒙り、三九〇年に續く一世代の中に、そは緩漫なる死滅を遂げつゝあつたのである。四一〇年ホノリウスより自衛の訓令を受けたる部族的官憲が、も早や之を遂行すべき何等の實力をも有しなかつたことを暗示することは、この項目についての證據よりして至當に思はれる⁽¹⁷⁾。

文献はこの結論を修正しても、必ずしも之を覆へしはしない。聖バトリックが、四三〇年の頃（恐らくダヴエントリーに於ける）彼の家庭を再訪したときに、彼は、彼のローマ・ブリタニヤの友人と縁者の間に於て殆んど常の如くに生活されてゐるのを見出した。さうして、聖ジエルマヌスが四二九年に、ペラギウス説の傳播を防がんがために、ブリタニヤに來たとき、彼は一護民官の娘を救治して、所謂『アレルイアの合戦』にピクト人とサクソン人を破つたるブリタニヤ軍の編制を助けたと言はれてゐる。しかし、是等の物語は、ローマ人の退去後二十年に、ローマ・ブリタニヤ文明の外觀が残されてゐたことを示すけれども、それ以上を證明する所がない。我等は聖ジエルマヌスの人なるこの護民官は現實に彼の命令により、その稱號の含めるらしき政治の機關を有したと論ずることは出來ぬ。ローマ・ブリタニヤ的舊組織の遺物は四三〇年とその後までも存したことは疑はれないけれども、そは遺物以上のものではない。

ローマ・ブリタニヤ考古學の證據は、かくして

コリンウッドの『ブリタニヤとローマ帝國』（間崎）

アングロ・サクソン考古學の證據を確認する。兩者は一世紀以上も戰爭が繼續したといふ思想を大に不信ならしめ、兩者はこの居住が概して、平和の仕事であつて、かく荒地は移民によつて占有せられ、彼等は地方官憲のなほ殘存したるところに於て、通例地方官憲から殆んど或は全然抵抗を受けなかつたことを暗示してゐる。こゝへ、考古學的證據の第三の支條が這入つて來る。オー・チー・エス・クラウフォード氏は、サクソンの分圃制度とは全く異なり、寧ろスコットランド高地小農地の圍繞或はウェールズ又はコンウォール州の農園に類似した精巧なる舊分圃制度がウェセックス丘原地に存在することを最近證據立てたのである。彼の示す所では、是等の田圃は、ローマの道路と組織的關聯を有するので、同時代のものである、さうして、之に、ローマ・ブリタニヤの村落の完全なる制度が結ばれてゐる⁽¹⁸⁾。そこで、クラウフォード氏は夫れ夫れローマ・ブリタニヤの村落址とサクソンの村落址とを示せるソルズベリー平野の地圖を編纂した。さうして、サクソン人の居住地は、

すべての川の岸邊に密在してゐるけれども、ローマ・ブリタニヤの村落は遍く高地に散在してゐる。兩制度は全く明確に相違してゐるので、理論上では兩者が同時に存在したことを可能ならしめるほどである。兩者は現實にさうだつたのであるか否か。ウエセツクス州の是等のブリタニヤ村落に於ける發掘は、少しもサクソンの品を出さなかつたので、兩者は併存しなかつたとクラウフォード氏は考へるけれども、その反対に、ローマ・ブリタニヤの住民が簡単に消滅したと信することも出來ない⁽¹⁹⁾。若しアングロ・サクソン考古學の提供する證據が誤りなきものであるならば、この居住は先住民の潰滅或は全體の移轉を生じ得る種類のものではなかつた。又この居住に先立てる侵入に於て、ブリタニヤの住民が絶滅されたとは想像されない。是等の侵入は疑もなく之を弱め、之を疲弊せしめ、その人數を減じた、又是等の侵入はそれの最もローマ化したる部分を破壊して、或る程度までローマ化を失はしめたらう。是等の侵入は、殆んど確かにその行政的中心地を破壊し、その破壊

によつて、その政治的團結力を失はしめ、その組織的自衛を不可能とした。がしかし、是等の侵入が之を一掃し去つたことはあられない。要するに、信賴し得る如き唯一の假説は、すべての考古學的證據が綜合されたときに、イギリスに兩民族の併住したる一時期があつたといふことである。兩民族とは一旦ローマ化したるものその舊文明の痕跡を今や殆んど示さないケルトの住民とイギリス移住民とであつて、兩者は或る地方に於ては、違つた地域に、即ちブリタニヤ人は高地に、イギリス人は川邊に沿ふて住つたのである。これはウエセツクス州に於て、確かに事實であつたし、他處に於て大にありようである。けれども之は普遍的法則であると斷することは出來ない。ブリタニヤとイギリス人の間には、當初、殆んど或は全然交通がなかつたかも知れない。しかし漸次に、さうして、恐らく頗る早い時代から、イギリス人はブリタニヤ人を融合し始めた。この行程は、種々の速度と種々の様式で行はれ、種々の軋轢を生ぜしめて、大體に於て、恐らく頗る早い時代から、イギリス人はブリタニヤ人を融合し始めた。この行程は、種々の速

平和の行程であつたらう。よしや交戦は行はれたにしる、何れの側も十分に組織立つてゐなかつたので、堂々たる戦争があつた譯ではなく、村落と村落間の局地的衝突、或は移住者の一隊と之を防がんとするブリタニヤの團體間の紛争だつたのである。兎に角、融合の行程は、徐々にブリタニヤ村落の大部分の遺棄と、漸々にブリタニヤ語の不^用を來たるしめた。之はイギリス人が自から特異の邦國を形成して、その隣邦と正規の戦争を行ひ得る前に、或る程度まで行はれてゐたに相違ない。地名の證據はこの假説に重味を加へる。エクワール教授は『イギリス語地名調査の歴史』中の『ケルト分子』(Prof. Elkwall; 'The Celtic Element,' in Introduction to the Survey of English Place-names, p. 31) に記して、『イギリスに見出だされた數多のブリタニヤ語の地名は、ブリタニヤの住民が最初アングロ・サクソン人によつて占有されたる部分に於てすらも、潰滅或は驅逐され得ないことを證明する。或る部分に於ては、ブリタニヤ分子が征服後、相當時期の間殘存したに相違な

じ、さうしてブリタニヤ人は或る程度まで、彼等自身の村落内に居住した様に見べる』と。この推論を生じた地名は二種ある。第一に、嚴格なるブリタニヤ名が存し、第二に、ブリタニヤ人の存在を記録するイギリス名或はスカンヂナヴィヤ名すらが存する。第一種に屬するは Kent, Thanet, Wight, Elemet, Loidis, Craven, と、隨分變であるが Deira と Bernicia なるイギリス王國の名である。Deira (Deivr, Deur) は南ヨークシャの河邊の地、『水』國を意味し Bernicia (Brenneich) は、亡びし Brigantia と『Brigantes の國』から出でたと言はれる。玆して、之は疑もなく可能である。但し原ベニシアは、ブリガント人に占有せられた地域よりも遙かに北方にあつて、彼等ではなくて、オタチニ (Otadini) 人が住んでゐたらしい。その他イギリス中に澤山に存するこの種類の名は、ロンドン、ヨーク、リンカーン、ドーヴィア、ウインチエスター、ドーチエスター、グロスター、ロクスター、マンチエスター等の如き、都市名及び河川、山地、林野、その他自然の地形の多數の名

である。村落及び屋敷^{ホーミーステッド}のブリタニヤ名は、西部の外、餘り普通でない、第七世紀まで、殆んど無事にブリタニヤ人の居住したエルメットの如き地方に於てすらも⁽²⁰⁾、ブリタニヤの村落名は至つて乏しいのである。

この研究にとり價値ある他の種類の名は、ブリタニヤ人の存在を記録せる非ブリタニヤ名である。その中で、最も普通なるは Walton & Walcot 鎮^ハ Wealatum= Welshmen's farm, Wealcot= Welshmen's cot である。ルイスの『地名辭典』(Lewis's Topographical Dictionary)には、ウォルトンが二十八個、ウォルコットが六個ある。その中、ハドリアヌスの城壁にある一ウォルトンは城壁の町(Wall-town)であり、残りはランカシャ、ノーフォーク、サリー、ソマセットを四至とする一地域に可なり廣く分布されてゐる。ルイスの『地名辭典』は一軒の家或は極めて小なる村落よりも廣からざるものに屬するその他多くの名を省いてゐるが、之は、是等の名が、少數の場合に、別の出所を有したかも知れぬことと相殺しなければならぬ。同一

種類に屬する他の名は Walworth, Warwick, Walsley, Bretton, Cumberworth, Kimberworth 等である。がしかし、以上すぐては、イギリス初期の名であつて、たゞ、イギリスのすぐての部分に、なほアングロ・サクソン移住後の最古の數世紀間その民族に融合されないで、ブリタニヤ人がなほその儘認められてゐたことを證するのみである。更に一層顯著なるは、第九世紀と第十世紀とに來住したテーン人とノルマン人とが、その地になほ未融合のブリタニヤ少數分子の存したるを見出したことである。これは Birkby なる名によつて證せられる。この名はカンバーランドに二個、ランカシャに一個、ヨークシャに一個 Brethy (D. B., Bretebi) 鎮^ハ 『ブリタニヤ人の村落』の言訛であることが知られてゐる。他處に於てもそは恐らく同様に説明せらるべある。注意すべしは、カンベランドのバークビーの中、一個はメリーポート (Maryport) のローマ要塞の殆んど近郊にあり、他は古代住所の名高い大聚團であつて、所謂ブリタニヤ居住地型式なのである。ランカシャにあるも

のはカートメル(Cartmel)にあつて、六八五年に、『之に全ブリタニヤ人を併せて』聖カトバートに賦與せられた⁽²¹⁾ 地域である。ヨークシャのそれは、ブリタニヤのユルメット王國內にある。アングロ・サクソン居住地域内に於てすらも、ブリタニヤ人の最終的融合は、ノルマン人の征服の間際までは、完成されてゐなかつたらう。

英語の中にケルト語のないことはブリタニヤ住民の潰滅或は驅逐を證するものであると、屢々想像せられた。その故は、我等の想像しつゝある如きブリタニヤ人の融合が行はれたならば、言語は人種と同じに混合された筈だからである。しかしこの推定は正しくない。エルメットの例に於て、全くブリタニヤ人の血統と言語を有する住民が第七世紀までその儘存在をつゞけたことが知られる。さうして、こは前述の如く、驅逐されたので

る。さうして、こは前述の如く驅逐されたのも絶滅されたのでもないことを想像すべき理由がある。カートメルの例に於ては、聖カツトバートの部下のものが同世紀の終に彼等の手に渡されたブリタニヤ人を殺戮し或は驅逐したこと暗示す

るものはないだらう。引用し得る實例はこれだけに止らないが、この二例に於て、確實にブリタニヤ的なる地域が後の時期にイギリス人の移住者に開放せられた。ブリタニヤの住民は斯様な移住民と混合するにはしたけれども、本質的には果されずに存續したことは確であると認められよう。故に今日エルメットとカートメルに住する人民は重に、第七世紀のブリタニヤ人から下降したものである、けれども彼等は彼等本來の言語を保存しなかつた。何れの例に於ても彼等の言語は、典型的英語の方言より外のものではない⁽²²⁾。彼等は恐らく彼等を凌駕し或は彼等と同數にすらも達しない英人の分子に自から同化したのであつた。もし第七世紀までブリタニヤ人が唯一の住民であつた地方に於て、この事實が發生し得るなら、他處に於てもそは發生し得べき筈である。

てもそは發生し得べき筈である。
イギリス全般のブリタニヤ人が彼等の自國語を
忘却したといふ見解は信ぜられぬことではない。
同様の事柄は、ローマ征服後のガリヤにも、發生
した。ケルト本來の言語は近代のフランス語の中

に極く僅少なる痕跡を残せるのみである⁽²³⁾ 極く最近消滅したるコニツシユ語 (Cornish) は、コンウォール人の語彙の中に殆んど何等の痕跡をも残さなかつた。同じことがその他多くの言語についても言はれる。ワインヂッシユの指摘する所では、外國語を学べる人民は、彼等の自國語を談ずるに當り、外國語の單語を借用するけれども、外國語の中に彼等自國語からの單語を移入することはないといふ意味の、通則が立てられる。然ならば、ケルト語を話すスコットランド高地人は、そのゲル語の中に、夥多の英語を使用するけれども、彼の英語は生粹のものである。この同じ原則はブリタニヤ語及びその他の例に適用せられる。この原則は、ヨーニッショ語の如き消滅した言語が、之を忘却したる人民の談話の中に痕跡を残さない理由を明かにする。故に、アングロ・サクソン語を學べる、ブリタニヤ人は自然、之を生粹の形で語るに至つたらう、さうして、彼等は、農耕、法制等の歴史によつて證明せられる如く、サクソンの生活様式を採用し、その反対の經路をとらなか

つたので、今日印度に於ける英人が土人の言語を採用せる如き仕方で、英人にブリタニヤ語を採用せしむる必要がなかつた⁽²⁴⁾。

熟知せられる如く、ウェールズ、次位に、デヴォン州とコンウォール州に、ローマ文明の遺蹟が第五世紀の初頭よりもずつと後までも存續をつづけた。がしかしケルト化せるラテン名やラテン語とオガム語 (Ogham) を併記せる墓碑や、又後代の傳説に於て、ローマ・ブリタニヤの歴史の眞の連續が求められるのは、この地ではなく、そは寧ろイギリスに於てであつた。そこではケルト人が久しくローマの保護の下に、自治に慣れ、また恐らく、國民的災厄の時代に於てすらも、過去の功業の若干傳承的記憶を保存したのでその血液を海外よりの新來者のそれと混淆して、イギリス國民を作つたのである。ローマ時代のブリタニヤの一層文化的なる分子を亡ぼした完全なる破壊を知れる歴史家達はイギリス的なるものは一切これをアングロ・サクソン人に溯らねばならず、近代的イギリスは、低地ドイツの海岸地の村落に形成せられ

たかの様であると結論したのである⁽²⁵⁾。この結論が速断であることは一例よりして知られる。イギリス精神が眞に最も早く開花したのは、その藝術的、知力的、宗教的の華々しき功業を遂げたるノーサンブリヤの王國に於てであつた。その時代の最大の學僧ビード、侍講アルクイン、創造の歌人ケドモン、ビューカッスルの十字架とその他一百の十字架を彫める彫刻家達、彼等は第一位の人々であつて、その代表せる精神的運動は、ヨーロッパの歴史上に於て、當時の最も大いなる事蹟であつた。しかも、その運動は、チーズ河とタイン河との間の國の、ジャロー (Jarow) マンクヴィアマス (Monkwearmouth) とヘクサム (Hexham) の周圍に發生した。この國は北はベニシヤ (Bernicia) 南はデーラ (Deira) の間にあつて、ノーサンブルリヤの他の何處よりもブリタニヤ分子が強烈なる處である。『ケルト人が放任せられて、ビードの時代を作り出したとは考へられない。彼等はウェールズでさうでなかつた。がしかし、ドイツでさうでなかつたチュートン人は何れともなし得なかつ

た。自然はこの地、即ち、チーズ河とタイン河との間の國土に、最古のイギリス史上に黃金時代を造つた混淆に對し正しい割合を見出したのである』⁽²⁶⁾。

これは又單獨の例ではない。運命の皮肉は、アングロ・サクソン年代記作者をして、サクソン人がブリタニヤ人に對して行つた征服と絶滅の戰争を記録しつゝあつた間に、ブリタニヤ名を、極めて多くのサクソンの首領達サードック (Cerdic) シードワラ (Ceadwalla) ムル (Mul) ケーダ (Ceda) に歸せしめてゐる⁽²⁷⁾。これは彼の物語その者を無意味ならしめる。けれども、之をば、サクソン人の間に傑出するに至つた人々の少なくとも若干が、サクソンとブリタニヤ系の混淆であり、是等の名を有する首領達は、年代記作者の考ふる所では、彼等の第一次到來の際に於ける新來者を指導せずして、居住地が少なくとも一世代を経たる後、高位に上れることを意味するものであると解釋するならば、完全に理解されるのである。さうして、之は原居住地は小部隊の疎らな滲入であつて、後に

至り初めて合一せられて邦國をなしたものであることは、考古學の暗示する所と合致する。名前と事件とは共に想像的のものであるにしても、サクソン人が彼れ自らの部族の初期の酋長に名前を附けたく思へるとき、彼にブリタニヤ名を賦與し得たことは、少なからぬ意義あることで、何れの場合にも、ウェセックスの大王達は混血人種であつて、その系統を、ローマ・ブリタニヤの祖先に溯り得ることの推論を避けることは出來ないのである。

是等の證據の示す見解は、之を要約すれば、イギリス人の移住者はイギリス全般に、ブリタニヤの住民を見出した。彼等は一旦ローマ化されて、その習慣と制度にはなほローマの刻印を有するも、彼等の全主要都市或は殆んどすべての主要都市の破壊と放棄により、又彼等のローマ化せる貴族の絶滅或は貧乏と無力に低下することによりて、その結合力と文明とが打撃はされた一住民を見出したと言ふことになる。この住民全體としては、ピクト人とスコット人の侵寇により勢力を削がれ、

人口を減じたので、新來者に抵抗することが出來ず、實は大に、之を歓迎したのである。そこには彼等に分有し得るだけの土地があつた。そのため、(たとひ局地的の軋轢が夥多存したことは疑はれないにしても)概して平和的に、居住は開始せられたのである。漸次イギリス人の増加するにつれ、彼等はブリタニヤ人を融合して、混血人種の首領の下に、自から邦國を形成し始めた。これは、多くの場合、融合を妨ぐる要素に對しては決定的戰争を、隣邦に對しては進撃的手段を生ぜしめ、北のダグサスタン、南のモンス・バドニクスの合戦の如き衝突を來さしめた⁽²⁸⁾、そは共に、西のブリタニヤ團體と東の半融合のブリタニヤ分子を多分に含めるイギリス團體間の關係を決定せんとする企から生じたものである。居住に關する斯様な見解は、デーン人のそれの如き組織的征服や、ブリタニヤ人の轉住或は絶滅の理論と相容れない所の考古學及び地名の證據と合致するのみならず、それは又、原居住は散村式平和的であつたけれども、後世の傳説が之を有力なる諸王による廣汎なる征服

の事項として示せる理由の説明に數歩を進めたものである。その傳説は、この居住の後の階段を殊更ら不當に示したものではあるまいから、是等の記憶がその當初の事柄を修飾することは自然な傳説が生じ、それは又過去の戦争の結果を強めたのである、しかし是等の傳説を考ふるに當つては、少なくともその中の若干はヴァイキング時代に發生し或はその時代によつて修飾せられ、當時の事件を溯つて、アングロ・サクソン居住の記述に投射せんとするに至つた傾向を注意すべきである。

アングロ・サクソンのイギリスは、ローマ時代のブリタニヤや中世のイギリスよりも、今日のイギリスに近いといふ感じがする。我等の住める時代は、その主要なる政治的努力が我等の國民的國家と唱ふる單位の建設と統一とに費やされた時代である、寧ろ時代であつたと恐らく言ふべきである。斯の様な時期に於て、この國(イギリス)の住民は、そが島であることを記憶し、その事實を内部の統一と外部の分離のための手段に用ゐた。

コリンウッドの『ブリタニヤとローマ帝國』(間崎)

ローマ人の退去からノルマン人の到來まで、ブリタニヤは島であつて、海峡は政治的事實であつた。同じ事が中世の終れる後の時期についても言はれる。けれども、前述の如く、ローマ帝國の時代に於ては、海峡は單に地理的偶然に止まり、ブリタニヤは北ガリヤと不可分の一體であつた。同種の合一が中世に存したことは主張するまでもない。そこには更に類似がある。この論文の論據が誤つてゐなければ、アングロ・サクソン時期は、ローマ帝國との合一期の間にブリタニヤの土地に蒔かれた種を、比較的孤立して養成したる如く、近代のイギリスは、之にその中世生活の全組織を與へた本土との豊富なる接觸の結果を、また比較的孤立して、完成したのである。こは我等の現代に於て殆んどあり得ず、今後數世紀間存しないかも知れない。けれども、世人がハンブシャーとノルマンディー、ピカルディーとケントが、互に密接不離の關係にあることを再び理解するの時期、英佛海峡は最早や、不信と危險の時に於て必然ありたる如き障壁ではなくして、寧ろ結帶たるの時期、歴史の

振子はローマの帝政時代に存したる英佛間の合戦を再び表示する時期、——それが今後到来するやうなり。(一九二九年一〇月)

参考書

F. Haverfield, *The Roman Occupation of Britain*. Pp. 304. Oxford, 1924.

F. Haverfield, *The Romanization of Roman Britain*. Pp. 91. Oxford, ed. 4, 1923.

H. Furneaux and J. G. C. Anderson, *The Agricola of Tacitus*. Second edition. Pp.

xc, 192. Oxford, 1923.

British Museum, *Guide to the Antiquities of Roman Britain*. 1922.

M. and C. H. B. Quennell, *Everyday Life in Roman Britain*, Pp. 140, illustrated.

Batsford, 1924.

R. G. Collingwood, *Roman Britain*, Pp. 104. Oxford, 1923.

Sir John Rhys, *Celtic Britain*. S. P. C.

K., 1884.

H. M. Chadwick, *Origin of the English Nation*, Pp. vi, 351. Cambridge, ed. 2, 1924.

E. T. Leeds, *Archaeology of the Anglo-Saxon Settlements*. Pp. 114. Oxford 1913.

O. G. S. Crawford, *Air Survey and Archaeology*, Ordnance Survey, 1924.

地図

Map of Roman Britain (Ordnance Survey, 1924).

Maps in Haverfield (*Occupation and Romanization*). Leeds, and Crawford.

註

「この記述の資料は、アンダーハム著『アラバニア』(1911年)のケーリアハイムの附録に巧く収められてゐる。

即ち著者の著述は、ローマ時代のアラバニアのローマ化中國貢に、若干誤りなる點が認められる。

即ち著述は、Cogidubnus) が、ローマ征服前のH. 征服

後の太守であつて、それは、タキッス著『アグリコラ』第十四節及び同所のアンダーソンの註、並に『ラテン碑銘集』(C. I. L. vii, 11)に記す所であつて、ローマ征服後間もない時期の最も精練せるローマ風の碑文がある。この事實によつて、當時ブリタニヤになされた藝術的建設的事業の性質が分る。

四、ハーヴァード著『ローマ時代のブリタニヤのローマ化』二五頁、或は『ローマのブリタニヤ占有』150頁、151頁に記せるブリタニヤの軍事地域と文化地域地圖を見よ。

是等の地圖に表はせる文化地域は本文に文明の『前哨地』と言へる相當なる縁邊地を含んでゐる。

五、この見解は、故ヴィノグラドフ教授の如き偉大なる權威の主張(『マナーの發達』第一、二章)と少しく異なつてゐることを讀者は注意されねばならぬ。教授は、ローマ時代のアリタニヤの大地主は、さうが、海外からのローマ人であると將だローマ化せるブリタニヤ人であると問はず、ローマの統治によつて發生したものであると主張してゐる。

六、ハーヴァード著『ローマ時代のブリタニヤのローマ化』中、藝術の諸草竝に著者の『ローマ時代のブリタニヤ』参照。十七、故にレタビー教授の觀察によるところ、『屬州ローマの建築は建築家の提起せる法則とは頗る異なるものがある。之をトリニティ、リヨン、ロンドンの美術館で研究するならば、『古典時代』末期の様式よりも原ローマスク式に似てゐるやうに思はれる』。〔『ロンドニウム』、11頁〕

八、例へば、ブリタニヤに於ては、スルの禮拜はバスに、ノーデンスの禮拜はリドニーに限られ、コシザウスはヘドリヤスの城壁の中程の處に於て崇拜せられた。ラヴァンナの開闢論中のファノ・コシザの書き入れから論すればコシザウスはノデンスとスルと同様なる中央寺院をそこに有したのである。ベラツカダーバズと西なる北カンバランドに崇拜せられた。

九、ガリヤのケルト宗教についての簡単にして容易に近づか易い記事に對しては『ケンブリヤ中世史』第二卷ジョリヤンの記述を見よ。

一〇、Verulamium. ラルチエスター、リンカーン、ヨークとケルスターの植民地(civitates)は、ローマ時代のブリタニヤのブリタニヤ的形狀よりも寧ろローマ的形狀を示し、それ等は滿期となる軍團兵の居住地であつて、部族的自治の中心地ではなかつた。

一一、Epigraphica, ix, no. 1012. の碑銘は、ハーヴァード著『ローマ時代のブリタニヤのローマ化』五九一六一頁に圖示し論議せられてゐる。

一二、『ラテン碑銘集』(C. I. L.) vii, 775 (Civitas Dunnonum) 776 (Civitas Dumnoni), 863 (Civitate Cattuvalliorum Tissonio) and 897 (この石碑は現存せざるゝ。Cynupi civitatis bricis et ceteris (西日に誤まれる。讀方が掲げてあるが、Brigantes の civitas の名を祕してあることは疑はれない。Zosimus, vi. 10. ホノリウスのこの上諭は civitates が

なほ重きをなしてゐたこと、換言すれば、帝國の改造は部族自治の制度に取つて代らなかつたことを思はせる。

一四、『ローマ化』一一頁。

一五、Athelstan は『英人のバシンウス、ブリタニヤの境域内に住する諸王と諸國民の皇帝』と自稱したと Cod. Dip. 349.

グリーン著『イギリスの征服』二四一頁に引用せる。これは用語上の單なる試みに止まり持続せられはしなかつた。

一六、この項目について我等の有する證據の二例に注意すべしである。第一に『アングロ・サクソン年代記』は、五七一年に、西サクソン人は漸次南岸からテムズ河の北へと活動

したので、ブリタニヤ人をベニフォートに破つて、オックスフォード周囲の地を領有したと言ひ、考古學は、オックスフォードが當時まで少なくとも一世紀間、サクソン人の居住する所であつたことを明にし、(*Archæologia*. lxxiii, pp. 174-6). 又、リーデ氏は未刊の文書の中に、是等は本來の西サクソン人であつて、ウオツシユ河から陸路を経て來たことを、確信的に論じてゐる。彼等がテムズ河に到達したと『年代記』に言へる通路は、斯様な通路を期待し得る様な遺物が全く存しないのである。第二に、五七七年にグロスター、シレンスターとバスがサクソン人に歸したとすれば、何故にアングロ・サクソン居住の極く初期に屬すと一般に認められる -ing の附ける數個の地名をグロスター、シヤやソマセシトが有してゐるかの理由を知るに苦しむべである。(Ekwall, *English Place-names in -ing*, p. 114. 記し)

て、エクウォール教授は一四頁に、『年代記』と地名の證據との間の不一致を註釋してゐる。

一七、ローマのブリタニヤ撤退は、一般に想像せられる如く、四〇九—一〇年ではなく、四一八年以後、恐らく四四二年頃に行はれたと、ベッラー教授の見解(*Journal of Roman Studies*, X, pp. 131-54)を以て注意する。これが望がれる。

筆者は同誌に於て (*Journal*, xii, pp. 74-98) 特にこの見解に參照して、本問題を論議し、世に承認せられてゐる時に筆者の賛成なる理由を擧げて置いた。ミラー教授は親切にも再び同誌 (*Journal*, xiii, 149. foot-note 3.) 筆者の觀察について評論せられた。教授は恰も筆者の主張は専ら四一〇年より後の貨幣がブリタニヤに存在せざることに依據せるかの如くに説き、(そは筆者の容認せざる所である、J. R. S. xii. 87 を見よ、同誌に於て筆者は三個の論據を舉示してある)、れば「ボノリウスの治世の間に、サクソン海賊の活動により英佛海峡が不安となり、ブリタニヤの大陸との貿易が衰亡し當時全く止みたる事實」に基づくと答へてゐる。この論證は同時に、(一) 海賊は全貿易を破壊し得るほどに強かりしも、統治者及び軍隊の運動を妨げるほどには強くなかつたこと、(二) 全貨幣は貿易船にて正規に海峡を渡り、之が不可能となつたとき、武装護衛船の下に之を積み込むことを誰も思はなかつたこと、(三)三十年間統治者は一筆の命令を以て、ロンドン造幣局を復活し、帝國內の銀の最多產地方の產出を之に供給せるとか、15の

新機貿をめにベーリング海、アラタニアの行政を遂行するを欲した(A. J. Evans, 'Notes on the coinage and Silver Currency in Roman Britain from Valentinian I. to Constantine III', in *Nomismatic Chronicle*, series iv, vol. xv, pp. 501-2), いふた我等に極めてむだ駄か。

一八、「航空測量と考古學」*Geographical Journal*, May, 1923.

陸地測量部による小冊子として再版(翻刻)がある。

一九、「ヒダース(E. H. Goddard)監修による銀皿による有鑑なる批判を行つた。クラウフォード出は、それな、該小冊子の十一頁に附錄として印してある。ヒダース氏の主張の要點は大體(1)ウイルト州には異教サクソン人の遺物が事實上存在しない、(2)ウイルト州のローマ・ブリタニヤの遺跡は、考古學的に古く、サクソン時代に、居住された筈である。(3)「Races of Britain」ではなく、*Hills. Arch. May. xxiv. 15-41* の中

に、ウェルシュの近代の住民に新石器時代の大なる殘存物を認めてゐる。故に、ウェザック州の中に於て、アッタニヤの大なる要素がサクソン人によつて融合せられたことが推論せられる。

二〇、ヨルメットは、六一六年頃、ヨーロッパに由り併合せられた。ネーヴィの附錄に書いてある『ヨルメットを占領しやかの國のケルトの王を驅逐し、ケルトは死んだ』といふのが國のケルトの王を驅逐し、ケルトは死んだ』といふのが出來る。

二一、W. G. Collingwood, 'The First English in Northumberland', in the *Archaeum* (Newcastle-on-Tyne), Jan., 1925.

コランウラムの『アラタニアペローラ帝国』(間崎)

トに居住を始めたのをいふ。W. G. Collingwood, *Angles, Danes and Norse in the District of Huddersfield*, p. 59.を見よ。ヨーロッパの現住民に、ローマ・アラタニアの痕跡を見出しうたがつた(これは實じゆね)だシーラン(Graven)に比多數を見出したのである。(Races of Britain, p. 251) しかしヨーロッパの地名は我等にヨーロッパ人が住民を驅逐したといふ彼の推論を受容するといふを許すだ。

二二、*Hist. de Scio. Cuthbert*, Surtees Soc., vol. ii, p. 141.

二三、西北部イギリスの「アングロ・セバーライク」語の半を記錄せる數字は、古代ブリタニヤ語の純粹の遺存である。しかるの殘存したるはエルメットに於てではない。

二四、是等の痕跡が如何に僅少であるかは Nyrop's *Grammaire Historique de la Langue française*, vol. i. に與くられてゐる如き、主題の何れの説明がよく知らる。

二五、ウェインセマニア(Windisch)の難點と Jespersen's *Growth and Structure of the English Language*, pp. 38-9. に見出される。

二六、之に反して、の結論が、支持し難いことを知り、闇つて、ローマ・ブリタニヤ文明は、多少、無接觸に殘存」、その征服者を征服した(寧ろ火急の推論)と論ずる作家を指名するものが出来る。

(註) 111

114 カドウイック Cladwick 教授 (*Origin of the English Nation*, p. 32.) は、サーチックは神話的人物である。彼の名は、サーチス・フォード (Cerdic's Ford; Charford) の如き地名からの「造構成」である。しかし教授は語を次じて、コロチコス (Coroticos) が d への變化は、殆んど第七世紀以前には起り得ない、故に『ウェールズ人の人口はなほ第七世紀の初めに、ヘンブリ州の或る部分に残存してゐたとしなければならぬだらう』と。氏は、引用せる他のブリタニヤ名を説明するのに、西サクソンの征服戦争が『ジルダスの苦情を言へるブリタニヤ人間の内訌の一に彼等の干涉をやるよ』始まりだとの暗示を以てしてゐる。序に、カヌモン (Caedmon) は、アリタニヤ語のカヌーノス (Cattinanos) である。

115、ソマセシュルウェイルト州を横断してゐる大なる土丘ワンスティック (Wansdyke) の築造をこの句に歸してゐる。これが西サクソンの進出に抵抗せる西ウェルズ聯合により破られたのであるならば、そは恐らく、モンス・ベニクス (Mons Badonicus) の攻圍後、ブリタニヤ人が少なくなつて

間崎万里

四十四年間平和であつた時期から日附せらるる。 (Gildas, *Historia*, xxvi; 神聖五十六年に置かれたる攻囲の日附に於ける異端に著しいは Oman, *England before the Norman Conquest*, pp. 203-1, n. te を見よ。) ピット・リバース (Pitt-Rivers) は、ハーベダヤクを後期ローマのものと示した。 (*Excavations in Barbury Dyke and Wansdyke*, 1892) もう少し、その設計は、それがローマ的でないことを私に確信せしめた。カルダスの寫本は、モンス・ベニクスをセヴァアーン河口附近に置いてあるが、こはワンスダイクリの西端の位置の記述と見られる。がしかしモンゼンは彼のジルダス版に於て、この記述を偽作としてゐる。ウイルトとソマセシト州の、この土丘のブリタニヤ側に於ける初期サクソンの若干地名 (Ekwall, *English Place-names in Old*, pp. 69, 70) は、最古の居住地が平和の仕事であり、小なる單獨の部隊によつて行はれたとするならば、十分合點される、けだし、その場合には、サクソン分子は後に形成されたブリタニヤ聯合内に容易に包含されるからである。